

小説

St. バレンタインは二度来ない

稲瀬 隆

令和二年二月十四日（金） 午後五時四十七分

ホテル バーバリ

「なんでオマンコって言っちゃいけないの？」

冴香がCODIVAに手を伸ばしながら呟くように問いかけた。

卓郎もチョコを齧りながら

「卑猥だからなんじゃない？」と答えると、

「なんだヨーそれ、ふざけんな！って」口元は笑っていたが、目元は怒っている。「男はさ平気でチンコやキンタマっていうじゃない。チンコはよくてマンコはいけないの？あたしが自分の身体を指して言ってるだけじゃん。」

「そりやそうだけど・・・」と卓郎は口ごもる。

「あたしたちはこれからセックスしようっていう女と男だよ？大事な単語でしょ？そんな遠慮おかしくない？」

そもそもはさつき冴香が「・・・をきれいに洗うね」って

言ったので、軽く窘めたのが発端だった。

「だいたいいさ、オマンコって文字にしないよね。谷川なんとかって人が詩に書いた、ってセンパイから聞いたことがあるけどさ。」

「おれも中学生の頃、探して読んだけどさ、覚えてないなあ。印象うすい」

「だいたい世の中はオマンコをバカにしてるよ。インペイしようとしてる。もつとウヤマえ、って思うよね。」

アソートのチョコは三つ目が冴香の口に入った。今日はバレンタインデー。もとはと言えば、彼女が卓郎のためにと買ってきた筈のものだったのだが。

「だいたい偉そうなこと言ったってみんなオマンコから生まれたんじゃない。キリストだって、ソクラテスだって、エジソンだって、みーんな、さあ・・・」

「ジュリアス・シーザーは違うな・・・」

「シーザーだってそのタネはさ マンコから入ったんじゃない。オマンコは命の出発点だよ！」

「はい 負けました、ゴメンなさい、みんなオトコ社会が悪いんデス」このコはあたまがいい。そう思いながら、卓郎がCODIVAの箱に手を伸ばすと、そこにはもう二つ折りのカードしかなかった。

「結局チョコ、ほとんどサツちゃんが食べちゃったんだ」

「じゃあ、ここに塗るヨ。」と冴香は口中で溶けたブラリネを自分の体に塗った。

「はい、タクさん食べてネ！ハッピー・バレンタイン！」

部屋のビデオ画面はワイドショーを流していた。冴香がAVを嫌がったからだ。二人が重なる足下では番組の女性アンカーが、本邦初のコロナ感染による死者を取り上げていた。この新型のコロナウイルスは、昨年末ごろから中国

で密かに指摘され、警戒されていたのだとも。

そう、先年の末から異変は始まっていたのだ。

令和元年十二月十三日（金） 午後五時三十二分

大手門交差点

信号待ちの手持無沙汰で手に取ったスマホに着信があった。

◆LIME 2019.12.13 17:32

みつよ 今日、呑み会になったから 先に寝ててチ

たくろう エーンはかけないで

たくろう まだ怒ってる？

みつよ それと呑み会 カンケイない

たくろう ごめん

【既読】は付かなかった

令和元年十二月十三日（金） 午後五時四十七分

ホテル キュンプチ

卓郎はベッドでスマホ画面を見つめていた。昨夜の妻、光代との言い争いがフラッシュバックする。久しぶりに、する、しないでめめた。そもそもいくら節目の年とはいえ、婚約記念日を思い出せなかったくらいは勘弁してほしい、そう思った。こっちも飲んで帰ってやる、と行きつけの角

打で飲み、勢いで秋場原に寄り「リフレ」、つまり「アキバ風のリフレッシュ」を試してみることにしたのだ。

宙ぶらりんの時間、何の気なしに海外トピックスをチェックした。米国大統領選の予備選挙の動向やノーベル賞授賞式などの後に、米国では例年に比ベインフルエンザによる死者が増えている、とか、中国でまたSARSのような肺炎発生の噂がある、とか、並んでいた。

「お待たせしました」

目鼻の大きい長身の女子が、ぎりぎりを隠せるだけのマイクロ水着でシャワー室から出てきた。

「ちよつと小さすぎて着替えが大変で・・・」

どこかエキゾチックな、それでいてちよつと田舎臭いようなギャル。

「サエって呼んで」と彼女は言った。

「OK・・・そのままちよつと回って見せてよ・・・タトウ

ー 入れてないんだね」

卓郎が週刊誌レベルのギャル情報を口にする、

「そんなことバレたらお父さんに殺されちゃう」

強烈な彼女の第一印象だった

令和二年一月十日(金) 午後九時四十七分

端袋 ホテル パーバリ

そんなサエと一月、店を通さずに会うことになった。大柄で顔立ちがユニークな彼女は、なかなか指名が入らないのだ、と言う。本名は冴香。年は二十歳。普段は居酒屋の店員で、「これはバイト」と両胸を押さえて屈託なく笑った。ロシアン・クォーターで、父親がロシアン・ハーフ。「カッコよくて、めっちゃめちゃ怖い」のどという。そんな厳しい父親に育てられながら、こんな「バイト」をしている。卓郎は少しギクツとした。彼にも一人、同じくらいの娘がいたからだ。

以前ある週刊誌の記事に、警察庁の登録店舗数から割り出した日本の風俗嬢はおよそ三十万人だとあった。掛け持ちや幽霊嬢がいたとしても、無届け営業や他業種を騙る隠れ風俗、グレーゾーンを考えると、実態はそれよりはるかに多いだろう。そうした業種の「適齢人口」から考えれば、おおよそ三、四十人に一人がそうした仕事の「現役」ではないか。これに経験者を加えたら、空恐ろしい割合になる。まさか我が子は大丈夫だろうか。卓郎は思わず冴香の寝顔を見つめた。

「また会いたい。定期さんになって」と冴香が言い、別れ際にQRコードを介して「LINE」で繋がった。

「じゃ またね」とハイタッチして、そのチャット画面を閉じると、ウェブニュースのヘッドラインが出た。

日本でもコロナ感染例、第一号が出た、という。武漢渡航歴のある中国籍男性だった。

仕事でもプライベートでも中国と接点のない卓郎は、安心した。

令和二年三月十一日(水)

◆LINE 2020.3.11 23:42

タク もうすぐホワイトデーだね なにあげよか(笑顔)

サエ そだね、トイレットパーパー！w(笑) 近くのス

ーパーからは完全消えた！！ウチはまだあるけど

w

お財布がほしいな 中に入れる紙の方が欲しいけど

タク 紙、女子はたくさん使うからなあ あ その紙じゃ

なくて？w w 紙の方は オリンピックチケット

なんてどう？

サエ コロリンピック？ やれないってことは もう 確

定でしょ

令和二年三月十三日(金) 午後五時五十二分

端袋 ホテル プティパリス

いわゆる『インバウンド』需要がピークだった頃はどこのホテルも一杯で、ラブホテルでも家族連れの外国人が溢れていた。今年も国の対応が遅れて一月末の春節には、政治上の問題で台湾、香港、韓国を敬遠した中国からの観光客は相当数が来日した。だがその後、中国をはじめとする各国で出入国制限が始まり、街中で見かける外国人観光客は例年より圧倒的に少なくなった。

以前は大陸からの観光客が受付を悩ませていたであろうこの駅近のラブホも、今は相応に「旺盛な欲求の内需」だけで成り立っている。前の客たちの吐息が充満し、体液もあちこちに付着しているに違いないこの手のホテルでは、クリーニングがとても気になるところだ。とくに昨今、海外からの利用客を想像すると、コロナリスクが恐ろしい。「まあ、きれいそうだよね」サエがグラスなどをチェックした。

ホテルの裏側事情を聞き知っている卓郎には、見かけのきれいさなど単なる気休めにすぎないことは分かっている。むしろ部屋の片隅に控えめに置かれた小さな紫外線灯付き空気清浄機が頼もしく思えた。

「タクさん、ありがとう！」とさつき一緒に買った財布の包みを開けて、冴香が抱きついてきた。

「なに、これ？」キスと同時に拓郎の口に何かが口移しにされた。
「プロポリス・キャンディ！ コロナ除けにイイっしょ？」

卓郎は妻と娘へのバレンタイン返しを何にするか、悩みながらシャワーを浴びている。とくに地方で一人暮らししている大学生の娘には、何を送ってよいのか見当がつかない。最近の若い子たちの流行りはどんなだろう。

冴香に聞いてみよう。「ねえ、相談なんだけど、姪っ子のさ……」

二週間ほど経った二十七日、国内の感染者数は百に達し、TV画面には黒地に白文字で三桁の数字が映し出された。ほどなくして、コメディアンSがコロナ感染で死亡した。

クルーズ船以来、コロナは一部の人の特別なこと、ニュースの向こう側のことと思われていたが、一挙に茶の間の事件になった。文字通り命を懸けた、彼の最後にして最高の仕事となったのだ。

令和二年四月十日（金） 午後五時二十九分

端袋 ホテル サザンアイランド

小さな不動産会社に勤めていて、母親はスーパーのパート、妹は中学三年生だという。「ロシアの『血』は？」と聞く

「お父さんは北海道生まれ。ジイちゃんは漁師から海産物の商売になったって。」

祖母とは離婚したのだという。「気が荒かったらしいんだ……」

卓郎も「湯」鉄砲を返した。絞った両手から飛び出した湯は低く飛んで、冴香の乳首に当たった。

「ばかぁ……」

「それにしてもさ」と浴室を出てバスタオルを渡された拓郎が聞く。「店、大変だろ？」

「そう、シフト激減だよ。ホントはさ三月、四月は歓送迎会とか、連休前に稼がなきゃいけないのに！」

薄着の冴香は着終わるのが早い。

「そかぁ、人数制限も厳しいしね」

卓郎がネクタイ締め終わるのを、電子タバコふかしながら待っている。

「予約がぜんぜんない！タクさんの会社の宴会、頼めない？」

「ていうか、オレ行っちゃっていいの？ 店教えないって

一日、遅ればせながら全世界からの入国者に二週間の待機要請することが決まり、令和の『痰壺行政』と揶揄される布マスク全戸配布も決定された。感染は世界中に広がり、累計死者は十万人を超えた。七日に発出された緊急事態宣言下で酒類の提供が規制され、冴香の居酒屋は八時閉店を余儀なくされている。

部屋に入るなり冴香はマスクをとってプハーツと息を吐きだすと

「シャワー！ シャワー！！ 感染対策ー！！」

ダイナミックにダメージ・ジーンズと下着を脱ぎ捨て、浴室に飛び込んだ。

二人は二人で汗をかき、それを流し合うために二人で浴室に入った。

すでに浴槽は満杯で、湯は止まっていた。二人が向かい合って入るには浴槽は狭く、胸からは湯に浸かれない。

少しリラックスした冴香が、両手を丸く重ねた『水鉄砲』で卓郎に湯をかける。

「ちっさい頃、お父さんと、妹と、こうやって遊んだなあ」

今まであえて聞かなかった家族の話をし始めた。父親は

言ってたじゃない……」と笑う。

「そだった！ダメか……なら、今日のお小遣い、増やして！お願い」

別れ際、いつもの分に一を足すと、ニッコリと手を合わせて

「お願い！もう一声！！」

「なんの競りだよ」と思わず笑ってしまふ。

数日後、全国民に十万人の給付が決まり、翌々日には感染者累計は一人を超えた。その数日後、夫も俳優の女性司会者Oがコロナで亡くなり、国内のコロナ死亡者は三百名を超えて、月末には世界の死亡者累計が二十万人を超えた。世界の死者数はわずかに二週間で倍になったのだ。

令和二年五月二十八日（木） 午後六時五十六分

端袋 ホテル・サファリ

どこにも出かけられない在宅連休もあけぬ二日に累計死者は五百名を超え、翌三日には感染者が一万五千人を超えた。緊急事態宣言は月末まで延長されたが、徹底した活動自粛の成果か、半ばには東京の感染者は一桁となり、全国合計でも三十人を下回る日が続くようになった。二十六日には三都県で酒類提供時間は二十二時までとなった。

卓郎は知人を介してコロナ感染をチェックする免疫テストキットを手に入れた。罹って二、三日後なら感染の有無を推測できる。これで少しは濃厚接触者のコントロールが可能になるかもしれない。自分と冴香の接触も、だ。

二人は疲れた体をベッドに横たえ、天井を見つめていた。「よかった・・・。」と冴香がつぶやく。「陰性だったって、店にも言おう。知り合いにチェックしてもらったって」「せっかく店の規制も解除にもなったんだし、な」「そう、アレめっちゃ、助かったよ。死ぬかと思った！」屈託なく笑ったが、すぐに眉をひそめ「でも提供が十時までつてことはオーダーは九時半締めで、前に比べてあがりはずっと少ないんだ」

やおら毛布を払いのけて座りなおし、卓郎に向かって体の割に小さめの両手を合わせた。「それにまだ、給付金十万円来ないんだよね・・・だからお願い！ちよつと足して！」裸のビーマスに拝まれては、卓郎も目をそらすわけにはゆかなかった。

令和二年六月二十日(日) 午後十一時五十七分

広坂 卓郎宅

嵐は過ぎ去ったかのように、多くの者がホッとした。だが医療現場の疲労と混沌は滞留したまま、より大きな災禍への備えは遅々として進まなかった。中国での徹底隔離や野戦病院建設は別格としても、情報処理網や検査体制の構築で抑え込んだ台湾、韓国での成功はあまり参考にされることはなく、欧米に比した被害の少なさを引き合いに『日本の美德』がしばしば強調された。楽観的な思潮は、経済的困窮の解消要求と相まって、GOTプランが企図されてゆく。移動の自粛要請は一部を除き全国的に緩和された。他方、世界の感染者は一千万人を超え、死者は五十万人に達した。

令和二年七月十日(金) 午前十二時十七分

広坂 バックスコーヒー

月初め、アメリカの一日の感染者数は五万人に達し、日本でも東京を中心に感染者数が再び増え始めていた。東京では初旬に百人を超えた一日の感染者が、一週間後の今日は倍になっていた。かのWHOが「多くの国が誤った方向に動いている」と警告する中、月末にはGOTトラベルのキャンペーンが始まるという。

卓郎はノートブックPCを持って、ほど近いコーヒージ

東京アラートが一日に発せられ、都県境を越える移動の自粛要請が続いた。その後、第一波は終息したように見え、半ばには酒類提供が緩和され、十九日には制限が撤廃された。

卓郎は会社が試験導入したネット会議アプリのBOOMに難儀していた。妻のリモートワークも一足先に始まっていた。寝室で住み分けているが、居間はダイニングキッチンと一体なので何かと気を遣う。

◆LIME 2020.6.22 0:32

サエ めっちゃ忙しい。アルバイトの人数減らされちゃったから。

タク 仕事があるのって いいことじゃん？

サエ 店長が お前はよく動くから残してくれた。でもだんだん仕事量が増えてきたのに、人間がたりない！タクさん手伝ってよ(笑)

タク オレの時給は高いぞー(笑) で次、いつ会う？

サエ ゴメン、忙しくて(汗) それに今、お金は困ってないし

タク (驚) お金のため じゃなくてさ 会いたいとか ないの(汗)

サエ あは ゴメン とにかく忙しい

ヨップに行くことが多くなった。フリーWiFiが使える店が増え始め、それ用のセキュリティも手軽になっている。

◆LIME 2020.7.10 12:18

タク サツちゃん 何してる？ バイトは？ ちゃんと食べてる？

サエ 生きている シフト少ないけど お弁当出したりしてる 店長がいい人で これ食べとかいろいろくれる

タク それはよかった じゃ頑張ってるね

令和二年七月十四日(土) 午前十二時四十三分

広坂 バックスコーヒー

◆LIME 2020.7.14 12:43

タク サツちゃん その後元気？ 【既読つかず】

令和二年七月十六日(月) 午前十二時三十一分

広坂 バックスコーヒー

◆LIME 2020.7.16 12:31

タク サツちゃん 元気？ 生きている？ 【既読つかず】

令和二年七月十四日(火) 午前八時五十分

広坂 卓郎宅

◆LIME 2020.7.18 8:50

タク サツちゃん 大丈夫なの？ 生きてる？ 【既読つ

かず】

なにがあったのだろう、卓郎は戸惑った。先月は会わなかったが、それで疎遠になりかけているのだろうか。それとも勤め先でなにかあったのだろうか。もしや誰か男ができたのか。少し寂しくはあるが、それが冴香の望むことならば、それはそれでよい気もした。

だが連絡は唐突な文面でやってきた。

◆LIME 2020.7.20 0:24

サエ タクさん ごめん 助けて なるべく早く会いたい
タク どうした？

サエ 会ったら話す 会いたい 会いたいよタクさん

是非もなく 卓郎は翌日、会うことにした。

令和二年七月二十二日(水) 午後五時三十七分

JR端袋駅前 く ホテル プティプティ

気象がやはりおかしい。もう七月だというのに今月は晴れた日が二、三日しかなかった。三十度を超える日もあれ

ば二十度ぎりぎりの日もある。今日は曇り空で、朝まで霧雨だった。

花壇の縁に背を丸めて腰かけるシルエットは遠目にも衰弱しているのが分かる。雨はとつくに上がっているのにレインコートのフードを被り、蒸し暑そうなダメージジーンズを穿いていた。大きめのサングラスをかけて、足下の水たまりを見つめている。冴香が卓郎に気づいたのは、肩に触れられたときだった。

「おはよー。」

彼女はゆっくり立ち上がり、そう言いながら右によろけた。

「だいじょうぶか？」

「足がちよつとね・・・あとで見せる・・・」

そう言っ、ちよつと場違いのフードを左手で抑えた。少し足を引きずっている。

すぐ横になりたい、という冴香に合わせ、一番近いネットカフェのような手狭なホテルに入った。

「お父さんと喧嘩した、って？」

卓郎が後から付いて部屋に入ると、サヤは後ろ向きのままフードをとり、カットソーとGパンをゆっくりと脱いで、向き直った。

「そ・・・」

タクは言葉をのんだ。左目の外側が青紫に腫れあがっていて、右の脛には包帯がまかれ、ややむくんだ脛には大きなバンドエイドが貼られていた。

「やられた・・・おとう・・・オヤジに やられた」

「・・・まさか・・・」

「あんなの もう親じゃない 縁切った」声がかすれ、泣き声になった。

「理由は？」

「給付金！ 実家行っさ、あたしの分十万円も来てるはず。それあたしだから出して。半分でいいから頂戴って言っただけ。」

「それで？」

「ふざけるな、って、叩かれた」一息吸って「あたしもなにすんだ！ って押返した 蹴とばされた なにか投げたかも そしたら・・・」

「そしたら？」

「ゴルフクラブで思い切り やられた 倒れたら 蹴られた」

サヤが右脛のバンドエイドを剥がすと、赤黒く腫れあがった傷があり、ショーツをめくって見せた臀部にはこぶし大の青あざがあった。

「・・・倍くらい腫れちゃってさ・・・折れたかと思った・・・けど、結構ジョウブじゃん？ あたし・・・」
力なく笑いながら 「でも 昨日まで歩けなかった 友達の家で隠れてた」

そして絞り出すように言った「オヤジがさ・・・」

「・・・もう死ぬか、出て行ってくれ、って」

まだ腫れが残る青あざの涙目を見開いて

「あたし もう ダメだ タクさんが命綱なんだ」
その日の拓郎はただ黙って、そつとサエの肩を抱き続けることしかできなかった。

この日GOTTOTラベルのキャンペーンが始まった。それは国内感染者数が過去最高に達した日でもあった。

令和二年八月二十四日 午後一時十七分

仙ヶ谷 ビジネスホテル ラクシー

連日、厳しい暑さが続く。週末の雨が上がって蒸し暑さがひどい。

アメリカの感染者は累計五百万人に達し、日本の感染者も中盤に連日千人を超えた。たつた百人でTVの表示が暗転した頃から、まだ半年も経っていない。七月のGOTT

キャンペーンが影響したことは明らかと思えたが、政府関係者は否定した。一人の感染は『濃厚接触者』の就業制限という『連座制』によって、個人だけでなく組織にとつても深刻なダメージをもたらしている。疫学調査のシステム化、PCR検査の拡大、有効薬やワクチンの開発・試験・認可など、すべてが遅々として進まず、保健所と医療機関は『竹やりでB29と戦った』歴史を繰り返しているかのようだった。

卓郎は家での妻とのバトルを避け、ホテルに逃げ込んでいた。その午前中、リモートワークの区切りがついてリンクを切り、スリープにした刹那、卓郎のPCに突然、冴香のヌードフォトが現れたのだ。ウェブのクラウドから勝手に『今日のお薦め』を表示する不快アプリの仕業だろう。素早く消したつもりだったが、光代がそれを見とがめたのだ。

「だれ、これ？」

「あ、いや、今、webから勝手に届いた写真！」

「普段こんな見るから、紐づけされて送られてくるんですよ？ だいたいね・・・」

「あ、十二時までにメール出さなきゃ。で、午後はリモート会議に・・・」

秋雨前線がうつとうしく居座り、雨の日ばかりだ。

欧州の一部で感染が急拡大する一方で、日本の感染者数は『五、六百人に安定』し、高止まりの『小康状態』となった。だがこの頃から次第に、この『大本営発表』が真に感染の盛衰を反映しているのか、疑念を抱く者も増え始めた。

もう二か月近く、冴香への書込みには既読が付かず、向こうからの書込みもない。さかのぼって見たが、とくに予定の書込みはなく、感情的に衝突した覚えもない。また栃木の実家とトラブルなのだろうか。前回のトラブルの時はずい助けを求めてきた。こんなに長い音信不通ははじめてだった。いよいよ新しいパパさんでも見つかったのだろうか。なにか寂しい思いと、ちよっとほっとしたような思いとが胸中をよぎった。

仕上げた書類を送信して、コーヒーマップをすすり、スマホを開けるとLINEにメッセージが入っていた。

◆LINE 2020.9.14 14:36

サエ 入院中です 窓からは寂しい川が見える へ川辺の

写真> 友達の家で夜中 息ができなくなつて救急

車呼ばれた。あたしうつ病だから入院だってw こ

こ精神科の病院

サエ タクさん あたしのこと忘れちゃった？ (泣)

と、泥沼での応戦から、転戦と言う名の敗走に入った。

リビングと寝室とで住み分けても利用回線は一つだ。転送ファイルが重いから、と言いつつ家を離れたのだ。コーヒーマシンも考えたが、当節、人込みは怖い。周囲のイライラをよそにマスクを外し、大声で喋りまくるイケイケのボーイズ、ギャルズ、そして妙齢のおばさま方はみな、ウィルス散布機だ。その点、ホテルは今、格安で利用できる。東京オリンピックを当て込んで、ビジネスホテルは言うに及ばず、ラブホテルさえ多くが外国人向けに小ぎれいな改装をしたが、今日日、観光客はまるで来ない。そこで今は老舗ホテルからラブホまで、web環境を整えて『デユース』ニーズの取り込みに必死なのだ。

冴香からの連絡は、あのDV事件から間もなく途絶えた。最後のLINEでは実家との連絡を絶ち、父親の口利きで借りた以前の部屋は引き払って、友人のマンションに同居させてもらっている、とあった。

この月の末、政府は新型コロナウイルスへの対応ルールの見直しを表明した。

令和二年九月十四日(月) 午後三時四十七分

広井坂 ビジネスホテル リーチアウト

サエ これ 今日の昼食 ヘトレーに載った食事>

おいしくないけど まずくはないw

タクさー！ーん！

タク おっ おーー 入院してたんだ(驚) 調子は？

顔見せて(笑)

サエ やつと気づいてくれた！ 顔はやだ！ すっぴんだ

し 今！ブスだからw

今週末に退院だって また会ってね！

タク 了解！ しっかり養生してね

サエ 養生？ わかんない・・・w

救急車から精神科への入院？ 親戚に関係者がいるから、昔のような強制入院が難しいことは知っている。家族の承諾が難しいサエの現状から考えれば、入院は本人が了承したのだろう。病院にすがる気持ちがあつたのだろうか、と卓郎は思った。

令和二年九月十八日(金) 午後五時三十九分

JR端袋駅前 ー ホテル バーバリ

いつまでも暑い九月だ。三十度を超えたのも今月、今日で十日目になるだろう。夕日さえジリジリと熱い。

冴香はいつもの花壇に座っていた。デニムの短パン姿

だった。

「ただいま」

表情に影はなく、心配したより明るかった。ただそれが抗うつ剤の効果かどうかは卓郎には分からない。

「久しぶり！」

ホテルの部屋に入ると暑いと言って下着姿になった。

「ケガの方は？」

「跡が残ってる！ ほら！」

尻のあざは黄色くなっていて、消えるのも時間の問題だと思えたが、脛の傷は二つ並んだ青黒い痕になっていて、容易には消えそうにない。

「パンダマーク！」とサエは笑った。

「体調はどうなの？」

「まあまあ、かな。ごはんも食べられているし・・・」電子タバコを取り出した。

「まだ友達のところにいるの？」

「うん まあ・・・」メントール香の息をふーっと吐いて「お風呂入る？」

「いや、暑いからシャワーでいい・・・っていうか、なんでも話せるからここ来たんで、無理しなくていいよ」

「タクさんのしたいことしよう できることはなんでもするよ」と下着になり、ショーツから脱いだ。真っ赤なブラ

晴れている。

冴香はいつもの花壇に座っていた。久しぶりに見た長い脚は、遠目にも膨よかになったのが分かった。

「やつ！ おはようい・・・」

マスク越しの笑顔は屈託がなく、声にも張りがあった。並んで歩くと冴香は以前より一回り大きくなったように思える。どちらも抗うつ剤の作用なのだろうか。

ホテルの部屋に入ると、以前のように床に座り込んで電子タバコを吸い始めた。

「これ有害成分がないヤツだから！ やめられないんだ」

「気分はどうなの？」

「すごくいいよ。御飯もおいしい。今、嫌なことは考えない」

「家は？」

「妹だけ連絡してるし、住所も知ってる。親とは縁切った。」

「お母さんも？」

「庇ってくれる気ないし、この前なんか金の無心された無心！ そんな言葉を知ってることに驚いた。

「なんか食べにくいとか？」

「なにもしないの？ もしかしてあたしが病気だから？」

はバックベルトが少し背中に食い込んでいるように見えた。「助けてほしいから 入院費とかまた借金だし・・・」

その日はシャワーで汗を流し、退院メモリーの写真だけを撮って別れた。肩を抱き合った裸のマスク姿だ。

令和二年十月十日(土)

アメリカでは大統領がCOVID-19に感染した。コロナなんてただの風邪だ、そう豪語してきた御仁だけに弱みは見せられない。感染回復者からの血清まで投与して、早期の回復をアピールした。毎日千人余の死者が出ている状況の中、他者の血を吸って治った、と皮肉る向きもあった。

卓郎は冴香にメッセージを送った。

◆LINE 2020.10.10 23:28

タク 体調はどう？ できたら来週の火曜日の昼 ちよつと会おうか？

サエ OK！

令和二年十月十三日(火) 十二時二分

JR端袋駅前 〳 ホテル サザンアイランド

秋雨前線が活発なのか、雨がちの日々だったが、今日は

「あ、いや、ちよつと心配で・・・」 口ごもると

「そういうの傷つく 前みたいに しよう！ で お手当てたくさん頂戴」といって あははと笑った。

「今、誰ん家に居るの？ 例のキャバ嬢の友達？」 ベッドに寝ながら頬杖ついて顔を覗き込む。

「・・・あ、ん、そう」ちよつと間をおいて、こたえが帰ってきた。

「親切なんだね そのコ」

「うん いい友達 だけど家賃高いから せめて半分は払うことにした」

「いくらくらい？」

「オートロックのマンションで、月十五万くらい・・・」

「七、八万 払うのって大変だね」

「そう、それにサエだつてご飯も食べるしお風呂も入りたい 光熱費もだから十万は渡さないと・・・」

とだって笑顔を見せた。自分も少しは稼いでいるから、と十万円くれとまでは言わなかったが。

令和二年十一月十三日(金) 午前零時八分

卓郎宅

クラスターが各所で多数発生した。北海道は感染者急増

に伴い、ススキノの店舗に時短や外出自粛の要請をするようになった。ここに及んで首相はG・O・T・O・イトの制限を要請したが、感染者数は過去最高の二千人を超え続け、G・O・T・Oキャンペーン全体の修正を余儀なくされた。たとえ時間制限や人数制限はあってもなお、飲食店の多くは忘年会・クリスマスシーズンへの期待を持たざるを得なかった。

◆ LIME 2020.11.13 0:19

タク その後 体調はどう？

サエ 会って 確かめて・・・

令和二年十一月十三日（金） 午後五時時十二分

JR 端袋駅ビル く ホテル サザンアイランド

なにか食べたい、というので駅ビルのレストラン街で待ち合わせた。

合流ポイントがいつもと違うので、お互いマスクだと服装でも聞いておかないや見つかからない。もつとピンポイントで場所を決めれば良かった、と後悔したがもう遅い。

すると背後から

「タクさん！ おっす！」と肩を叩かれた。聞きなれた声だが、振り返って思わず

「あの、どなた？・・・」と聞きそうになった、背の高い、

見事な『キャバ嬢』だ。

「タクさん、あたし！！」

髪を明るい茶色に染めて盛り上げ、目のエクステ長めの縁取りきつめ。胸元が大きく開いた真っ赤なミニワンピースのドレスに、十センチはありそうなハイヒールの白パンプス。両手は全部、派手派手なネイル。
「・・・どしたの？」

「友達に借りた。メイクもしてもらった。ちよつと小さいけど。どう？」ポーズをとるのだが

「どう・・・つて。」言葉に詰まる。

「今日から年末まで、ちよつとお手伝いに出るんだ。だからこのカッコ。どう？」

「まあ、どぎついほどエロ可愛い！」

「大成功だね！ だから今日は 大セイコー できないよ」そして、タクさんのオヤジギャグ、伝染っちゃったかな、と笑った。

いつものホテルの部屋で 冴香はワンピースを脱いで下着姿を見せた。真っ赤で派手な刺繍のブラもショーツもごつい作りで、冴香にはびちびちだ。

「触ってみて」

固めの素材で、体と下着の間に隙がない。

「指、入らないでしょ？ 触られない、脱がされない、の

鉄壁ガード！」

オッパブでもイメクラでもないから「健全！」と笑った。

令和二年十二月十九日（土） 午前零時十八分

卓郎宅

大阪では看護師不足でがん治療などの重要な病棟が一部閉鎖に陥り。自衛隊の派遣要請に至った。感染者数は増加の一途をたどり、医師会からは「医療非常事態宣言」が発せられ、各地で医療崩壊の危機が迫っていた。十七日、東京都は「年末コロナ特別警戒」を發出し、不要不急の外出自粛、三密の回避を訴えた。病床のひっ迫は深刻化していた。一筋の光明は、日本での使用が期待できるワクチンが欧米で次々認可されたことだった。だが他方、海外では注意を要する変異ウイルスが検出され、ワクチンの有効性が懸念された。

◆ LIME 2020.12.19 0:24

サエ タクさん ダメだ お客 減ったまま、戻らない

予約キャンセルばっか

タク ガルバ（ガールズバー）なんかはそれなり 入ってるらしいじゃん

サエ 常連さんたち頑張ってきてくれるけど それだけ

じゃ年末年始 暮らせない

お願い お金欲しい クリブレ（クリスマスプレゼント）とお正月のお年玉お願い

タク そんな厳しいの？

サエ 妹にニンベンドーのスキップ、あげるって約束しちゃったんだ

お願い！ 今あたしのたった一人の家族なんだ

令和二年十二月二十日（日） 午御一時十七分

端袋 中古スマホ・ゲーム機店 ゲド

卓郎が店に入ると、冴香はもうしゃがみこんで、ガラスケースの中に並ぶゲーム機を品定めしていた。だいぶ前に着いていたようだ。

「遅いよータクさん」笑いながら少しふくれっ面を見せてた。だが言葉にいつもの勢いが無い。

それからは店員と冴香とが、何を揃えるべきか、どんなゲームが今（アツい）か等々、卓郎そっこのけのやりとりを始め、「タクさん・・・」と、次に卓郎の名前が呼ばれたのは、支払いの時だった。

「ありがとう、ほんとにありがとうタクさん！」冴香はクリスマスカラーで包装された箱を抱えて、「これで約束果

たせる・」と静かに笑った。その顔は、うれしいというより安堵の表情に近く、そしてなぜか寂しげでもあった。「じゃ、オレ、仕事納めまでに出さなきゃいけない仕事あるから、これで帰るわ」

「ありがとね タクさん ほんとに 良いクリスマスとお正月を！」

卓郎はなんとなく元気のない冴香が気になった。うつの再発が心配だったのだ。

その後も都民、国民の自粛ムードは強く、大都市圏で年末の宴会やパーティーをターゲットにした飲食各店の期待は、ほぼ完全に打ち砕かれた。冴香が助っ人に入る予定だったキャバクラも、結局はほぼ開店休業に近い状態のまま、大晦日を迎えた。

令和三年一月一日（金） 午前零時十八分

卓郎宅

新年早々、東京都から政府に緊急事態宣言発出の要請があり、国からは飲食店への時間短縮協力金拡充が示唆された。その一方で、検査陽性や救急搬送での入院が困難な事例が急増して自宅療養中の死亡例も続発し、自宅療養者の

でも浩輔、本社採用でしょ？

「だからってクビがないわけじゃない。一か月分の基本給とちよっぴりの退職金、それでチョン！だ」

失業手当はもらえる？

「そんなのこれまでの半分くらいだ」

「来年はここ、家賃高いから出ていく。お前も行く先考えろ」

「そんな、あたしはほかに行くところなんてない・・・」

「じゃあ 前みたいに家賃と生活費の半分くらい稼いできてくれ。そしたら考える」

一月七日 首相は“改めて” 一都三県に緊急事態宣言を発した、東京の感染者数は二千五百人を超えた

卓郎の会社も出社率を二十%以下に抑え、不要不急の外におよび会食の禁止等、厳しい指示を出した。

さすがに冴香と会うのは控えざるを得ない。

新型コロナウイルスの感染予防・医療システムは全体の抜本的再構築が迫られていた。二十三日には全国の死者累計は五千人を超え、翌週には世界の感染者は一億人を超えた。

令和三年二月三日（水） 午前零時四十八分

浩輔の部屋

自殺も発生していた。

◆LINE 2021.1.1. 0:18

サエ あけおめ 昨年は楽しかったね 今年もよろしくタク ことよろ 今年がサツちゃんにとって素敵な年になりますように 正月なにする？

サエ ありがとウ 初詣に行けたら 行く あとはネットフリ

タク 感染ひどいけど コロナのスキを見て会おうネ
サエ りよ（了解）

令和三年一月一日（金） 午前八時四十二分

JR電車内

冴香は埼玉の祖母の家に向かっていた。両親との関係は断ちたかったが、妹と祖父母とは繋がっていたかった。久しぶりの顔見せとご機嫌伺いだが、幾ばくかの「お年玉」も期待しなかったわけではない。振り払っても頭に昨年末の浩輔とのやり取りがぼんやり湧いてくる。

「いよいよ店長、クビだわ。都内の支店整理だってよ。」

えっ？ あんな頑張って周りの店よりたくさんお客も入れたじゃん。お昼の弁当だってかなり売れたよ？

「夜中まで酒売るのに比べたら、ぜんぜんだ 光熱費くらいにしかならない・・・」

月初め、緊急事態宣言は十都府県で延長された。保健所、医療機関を経由しない個人向けPCRが民間企業によって始められた。

浩輔が夜十二時過ぎに帰ってきた。

浩輔は食事宅配のデリバ・イーツを始めていた。冴香は起きて待っていた。

「もう少し稼げない？」と浩輔は、カップ麺ともやしサラダを食べながら呟くように言った。

「定期さんは簡単に増えないし、割での都度は簡単に拾えないよ」密室でのいるるな危険を考えれば、単発の『お仕事』も安易に増やせない。ましてコロナのリスクがあるご時世。金回りの良い男も多くはない。

「こつちだって、命はって稼いでるんだからさ・・・」

デリバ・イーツは一本いくらの世界だ。数を稼ぐには、発注の多い店につき、速く走って、早く届ける。バイクは早い、交通規制を考えれば都心では自転車のほうが有利だ。信号「回避」は当たり前の危険走行をする。命がけでもある。注文のスマホがならない時は、『地蔵』のように店の近くで立ち尽くすしかない。配達が多いのはいづれもキツイ、暑い、寒い、雨降りなどの日、深夜二十四時までが勝負。ならしで時給千円を超えうるとはいえ、それを

維持するには相当の営業努力が必要だ。
「いいよなあ女は、売るもんがあつてよ。男は命削るしかねえからな・・・」

浩輔がボソつと溜まった悪露を出す。
冴香は怒りと涙が喉元に上がってくるのを感じた。

◆ LIME 2021.2.3. 1:04

サエ タクさん 起きてる？ ゴメンこんな時間に 今月は会えるかな お返事待ってます

タク こんにちは（こんばんは） 起きてるよ 今月は会おうね ちよび期待してるし

サエ あは バレンタインだね！ りよ！ こつちもお助け 期待していいかな 会えなかったから今キビシイ

タク そか・・ ラブチョコの返礼だww やっぱバイトも厳しい？

サエ 地獄！ おカネ欲しい 支払い大変 ごめんねい つもカネ・カネ言つてばっかで 自分でも嫌んなる

タク 少しでも送金しようか
サエ だめだよ どの支店とか本名も分かっちゃう お互いプライベートは守るんだつたよね

タク どのだれかはわからない 透明人間か ボクらは

入ったことを発表した。
令和三年二月十四日（日） 午前零時十二分

浩輔の部屋

浩輔はカップ麺を食べながら、チョコの包みを箸で指した。

「それで、おまえさ、おれへのチョコはいいけどさ、ここにあんのは誰用ってかんじなの？」

「パパさん用・・・」

「パパって、例のジジイか・・・そりや大事な太客だろうけどさ、そいつにPIERRE MARCOTTI、おれにはROTHE、愛を感じねえよなあ」

「バカ言わないでよ、浩輔には ほんつつとに感謝してるし、好きだよ。でもタクさんはぜんぜん別の存在。お金くれるのは助かるし、そのためもあるよ、チョコレートも。でもお金だけじゃない。あたしをバットで殴ったオヤジとは違う、ホントの親みたいなの優しさをくれるひと。」

「バカ言ってるのそっちだろ。父親ならなんで娘を抱くんだよ。ちんぽをおまえのまんこに入れるんだよ。ただのスケベジジイじゃないか」

「男はみんな同じだよ。おんなじ欲望持ってる。みんながルールで禁止しているだけ。それが外れた親子は近親相関

サエ そだね 透明だね ホントはサエもタクさんも居ないのかも

タク ちゃんというさ 会えばちゃんとボクの腕の中に入る

サエ あたしお金ないし 居場所もない 信頼できる大人はネットつながるタクさんだけ

あたしなんてほんとはいらないのかな この世にいないのかな いらない方がいいのかな

タク バカ言うなサツちゃん いてほしい いなきやだめだ 絶対に！

タク またLINE送る！ バレンタインデー 絶対会おうね！！ 絶対！！

タク 近くなったら 場所と時間 交換しよう 絶対に！

その後、十三日に待ち合わせの場所と時間を決める短いやり取りまで、冴香からのLINEはなかった。

世界のワクチン接種人口が一億人を超えた頃、EUから日本へのワクチン輸出が認められた。一筋の光明は見えたが、日本の国民がその恩恵にあずかるのはまだ暫く先だった。
そして十三日、WHOは世界の感染者数が減少傾向に

しちやう。タクさんなら許せる。あたしがしてあげられること、気持ちを返してあげられることがそれならば・・・」
「そろそろやめろよ」
「やめない やめたくない」
「じゃあ 出てゆけよ」
「浩輔が心配してるようなんじゃないから・・・」
「気まずい夜。冴香はなかなか眠つけなかった。」

朝、浅い眠りから覚めると浩輔はすでに居らず、割られたスマホが落ちていた。ひび割れで、踏みつけられたのが分かった。

令和三年二月十四日（日） 午前九時二分

卓郎宅 路上

妻、光代からのSOSが入ったのは、やや遅く起きた卓郎がトーストを齧っている時だった。

LIME phone

「突然 動かなくなっちゃったの！ どうしたらいい？」
怒鳴り声のうしろは自動車騒音だ。

「なにが？？」 車のことだろうことは容易に想像できたが。

案の定、妻がフラダンス・レッスンに乗っていった中古のミニが、動かなくなっただという。

「JAF呼べよ」の一言で済まそうとは思ったが、口を突いて出た言葉は「今行く」だった。

冴香との待ち合わせ時間までには、十分時間がある。そう思った。

長年乗りなれたボルボの赤いワゴンで246号を行くと、渋谷界隈の華やかさが途切れたあたりに、所在無げにちよこんとミニが止まっていた。

JAFにはもうすでに連絡したが、たぶん来てもわたし説明がわからないし、所有者もあなただから、と妻は卓郎を留めた。

待ち合わせまでまだあと2時間近くあった。冴香にはいつも通り、おはようのLINEメッセージを送った。今日の約束、忘れてないよ、のサインだ。だが既読はつかなかった。

JAFも渋滞で遅れ、ミニの特殊な作りにも手こずって、時間は容赦なく奪われた。

『ヤバイ!』と卓郎が焦り始めたのは、十時半をすこし回ったあたりだった。渋谷周辺の渋滞をどうかわしても端袋まで小一時間ではとても着きそうもない。光代がJAFと話し込む隙に、待ち合わせ時間の変更を冴香に打診した。

◆LINE 2021.2.14. 11:08

タク 四、五十分以上 遅れそう。リスケしてくれる?

が、LINEの既読はつかなかった。

十一時十五分を回ったころ、妻の発車を見届けてから走り出したボルボは、数分で渋滞にはまった。「メッセージにはまだ既読が付かなかった。」

『クッソー!!!』

卓郎は自分の読みの甘さを呪ってハンドルを叩き、叫んだ。

令和三年二月十四日(日) 午前十一時二十六分

JR 端袋駅前 花壇

冴香は時折すがるような目で、行き交う人込みから卓郎を探し出そうとしていた。右手は愛おしそうに花壇の縁においたPIERRE MARCOTTIの紙袋に添えられ、左手には役に立たなくなったスマホが握られている。その液晶画面はモザイクのようにひび割れていた。

冴香はスマホ・サービスカウンターでの小一時間のやりとりを思い出し、この世の中で自分ひとりが虚空に浮いているような絶望を覚えていた。

「メモリーのバックアップや機種、ご契約の変更ですと、ご契約者様のご同意が必要となります」

「ご契約者様は××様でいらっしゃいますね。」今は聞きたくもない父の名前

「料金の振替口座は私の名義になってますよね。」冴香は反論したが、それは受け入れられなかった。

では、新規契約を、と言いかけて冴香は言葉を飲み込んだ。手持ちの金がとても足りない。ならば他社での乗り換え契約へ、とも考えたが、自分には新規開設の身分証明がないのだ。免許証もパスポートもない。たしか健康保険証の場合は、三か月以内の公共料金領収書が必要だ。家族との繋がりを断ち、勤めも住所も定まらない身の上には、確かな身分証明はどこにもないように思えた。

頼れるのはタクさんだけだ。今日、お金をもらえれば、最悪、修理の依頼はできる。もし可能なら新規契約を、「支払いは自分の口座にするから」、とタクさんに頼んでみよう。

「あたしにしては頑張ったんだよ」って、このPIERRE MARCOTTI渡しながら。

でも待った! そんなことをすればお互いの真の名前や住所などを明かすことになる。そんなことを許容できるはずもないや。

冴香の頭の中では、そんな想像の会話がぐるぐる巡っていた。もうすぐタクさんは来る。とにかく会えたら相談しよう。

ひび割れたスマホは何度か震えたが、液晶画面は何も映さない。タッチも効かない。

「タクさんは必ず来る。今までだって、少し遅刻はしても、来なかったことなんて一度もないんだから。」

十五分が過ぎた。風はすこし冷たくなってきた。

「そうだ、二度目の時、地下街で迷って遅くなった時、あたしは怒って帰っちゃったけど、タクさんは二十分以上来たんだっけ。ゴメンメールがいくつも来た」冴香は苦笑いした。

三十分が過ぎた。厚手のジーンズを抜けてレンガの花壇から冷たさが浸みてきた。いつも楽しみだったランチタイムが過ぎてゆく。紙袋をそつと引き寄せ膝に置いた。

「お腹すいたなあ・・・」

五五分が過ぎた。先ほどから霧雨が降りだした。ヒートテックのアンダーウェアも氷雨には勝てない。体が冷え切ってきた。紙袋を開け、チョコレート箱を見た。リボ

ンが掛けられ、ハート型のシールで止めてある。
「捨てられちゃったのかな、あたし。 めんどくさいから
・ ・ ・」

紙袋をそつと覗き込み、ゆっくりハートの箱を取り出し
て、包みを開いた。

『タクさんへ この一年 支えてくれてありがとう I
LOVE YOU!』

小さなカードに書かれた文字が辛かった。

両手の親指と人差し指でゆっくりカードを裂き、ボックス
の蓋を開け、一番真ん中のハート型のチョコレートを撮
む。

「どこでもあたしは 愛されていないんだなあ・ ・ ・」

甘くて苦い味が口の中に広がり、気が付くと両頬を暖か
いものがつたい流れ、すぐに冷たくなった。

メッセージを伝えられなくなったスマホが一度、ブルン
と揺れたが、冴香がもうそれに応えて取り上げることはな
かった。

令和三年二月十四日（日） 午前十二時三十八分

JR端袋駅前 花壇

渋滞を抜けて駅前広場の外れのパーキングに車を押し込
んで、卓郎が花壇にたどり着いたのは十二時半をちよつと

回ったころだった。雨は防水コートの肩にすぐ水玉をつく
るほどの降り様になっている。卓郎は花壇の周りや雨宿り
ができそうなトラベルビュローや駅のコンコースを走っ
て回った。

彼女の電話番号は知らない。それどころか住所も、本名
さえも知らない。誕生日だけは、嘘でなければ分かる。そ
れだけだ。「言上の繋がりで、一年以上、付き合っ
てきた。仮想の縁で結ばれた人間関係が一瞬で消え去る現実。
卓郎はひとつの世界が溶けてゆくような眩暈を覚えた。

手足の長いシルエット、背丈が同じくらいのロングヘア、
冴えが好んで着そうな黒いハーフコート・ ・ ・ 目と足は
必死に人込みを追いかける。そしてかなりの時間が流れた。
あきらめて戻った花壇には、小さく丸められた濡れた紙
袋だけが、人知れず雨に打たれていた。

エピローグ

令和三年二月二十一日（日） 午前九時二十三分

卓郎宅

先週のできごとをぼんやり考えながら、卓郎は頭の半分
で朝刊を眺めていた。

昨日、首相は東京五輪・パラ開催の決意を表明。我が国
にはワクチンの第二便、四十五万回分が到着したようだ。

だが、この日世界の感染者は一億人を超え、変異株も広が
りつつあった。

あれからずつと冴香とは連絡がつかない。だいぶ以前に
もこんなことがあったが、数日で復帰した。利用料金が落
ちなかったらしい。今回もそうであってほしい。そう思い
ながら紙面を眺めていると、ちらちらと動くものが目の隅
に映った。

こんな晴れた日には狭い庭でも、数本の木をめぐって鳥
が飛んでくる。そう思って向き直ると、そこには窓ガラス
にとりついてものがく淡白色の羽のカゲロウがいたのだった。
まだ二月末で、しかも水辺もないこんな都心だ。百歩
譲ってクサカゲロウだが、それなら色ですぐわかる。いつ
たいどこからやってきたのだろう。

不審に思いつつ、レースカーテンでそつと包み、外に向
けて放った。だがカゲロウは、ほんの少しもゆかぬうちに
舞い戻ろうとする。外はまだ寒く、部屋が暖かいからだろ
うか。とはいえ半日ほどの命を囲いの中で終えるのは忍び
ない。せめてわずかでも雌雄巡り合う機会がある庭を飛び、
最後をむかえてほしい。

「ここにいちやだめなんだ・ ・ ・」

再びそつと手で包んで庭に話すと、それは弱弱しく舞い
上がっていった

卓郎にふと 思いがこみ上げた
「さっちゃん！」
男は小さな嗚咽のみ込んだ。
その後この国は、一日十万人を超える新型コロナ感染者
を抱え、混乱と困窮の中で漂流することになる。